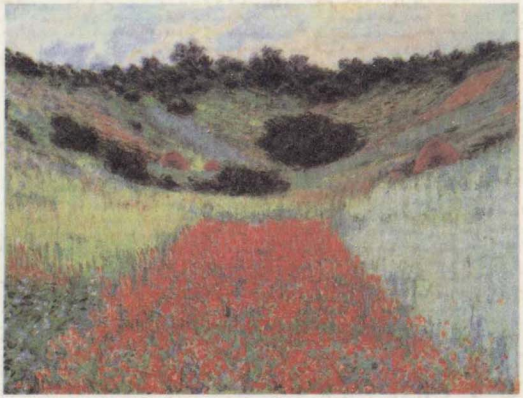
ブルックナー・コレクション

結婚式の写真

アニータ・ブルックナー
小野寺健訳



晶文社

著者について

アニータ・ブルックナー

一九三八年、ポーランド系ユダヤ人の両親のもと、イギリスに生まれる。コートールド美術研究所に学び、現在同研究所教授。一八、九世紀の美術史家。六八年には女性としてはじめて、ケンブリッジのスレイド・プロフェッサーを務めた。八一年に処女作『門出』を発表。八四年、『秋のホテル』でイギリス最大の文学賞ブッカー賞を受賞。『結婚式の写真』（八五年）は受賞後第一作。現代イギリス最高の作家としての名声をゆるぎないものとした。

訳者について

小野寺健（おのでら・たけし）

一九三一年、横浜生まれ。東京大学大学院英文科修了。横浜市立大学教授。

著書―『イギリス的人生』（晶文社）

訳書―ブルックナー『秋のホテル』、ヒューズ『ジャマイカの烈風』（以上晶文社）、ドラブル『碾臼』（河出文庫）、ロレンス『息子と恋人』（筑摩書房）、『20世紀イギリス短篇選上・下』（岩波文庫）ほか。

ブルックナー・コレクション

結婚式の写真（けっこんしきのしゃしん）

一九八九年一一月一五日発行

著者　アニータ・ブルックナー

訳者　小野寺健

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

堀内印刷・美行製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ブルックナー・コレクション

結婚式の写真

アニータ・ブルックナー

小野寺健訳

Anita Brookner:
FAMILY AND FRIENDS
Copyright © 1985
by Anita Brookner
Published in Japan, 1989
by Shobun-sha Publisher, Tokyo
Japanese translation rights arranged with
Selobrook Ltd. c/o A. M. Heath & Company, Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

〔目次〕

結婚式の写真　9

解説――小野寺健　249

ブックデザイン　平野甲賀

創作上の諸規則の利点については、市民社会の秩序と同じように、多くを語ることができる。規則を守る者が、劣悪なもの低俗なものを作ることはない。それは法律、秩序、幸福によって人格を形成した者が、耐えがたい隣人やひどい悪党になったりすることがないのと同じである。ところがその反面……諸規則は、われわれがほんとうに自然の価値を知る能力や、その能力を表現する力を破壊してしまう。

ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』一七七四年

I

ソフカがいる。結婚式の写真だ。すくなくとも、わたしは結婚式だろうと思う。ただ、新郎新婦がいない。ソフカは背筋をのばしてすっくと立っている。肩をいからせて昂然と頭を上げている姿勢は、二世代前のものだ。ビーズをちりばめた豪華なドレスを着て、髪には白鷺の羽を挿している。帽子についていたものだろうが、帽子そのものは髪型のせいで見えない。髪型自体が帽子のような形をしている。ソフカのうしろには、彼女の二人の娘が立っている。やはり美人だが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

どことなく結核を病んでいるような感じがある。訴えるようにほほえんでいる大きな目のせいかもしれない。娘たちは白いドレスを着て、長い髪にリボンをつけている。これは赤だったのを、わたしは知っている。ソフカの生きがいでご自慢の長男は鷹揚に微笑しているが、すでに怠惰な勝利者だ。白いタイに燕尾服を着た彼は、オーケストラの指揮者のように見える。二人の娘のあいだに立っているその姿は、兄というより庇護者のようだ。やがて、それを立証する機会が何度もおとずれたわけだが。病弱で甘やかされた弟の姿はどこにも見えない。それとも前列であぐらをかいて座っている、かわいいが不幸を背負っているような子供たちの中なのだろうか。女の子はものすごく長い髪をして花束をかかえ、男の子はサテンのような生地の長ズボンに上着を着て、真剣に写真屋をみつめているが。そうだ、アルフレッドは右側にいる子にちがいない。そのまわりは、みんなどうでもいい、ただ婚姻関係だけでつながっている親戚にすぎない。やはりビーズをちりばめたドレスを着ている太った女が一人。陽気そうな男が数人。胸に滝のようなレースの襞かざりをつけた、ひたむきな表情の若い感じの女が一人。そして左の端には、この女の前に斜めにのりだしているような格好で、鳥のような顔の、かわいい少女がいる。この中には誰ひとりとして、ソフカくらい堂々としている者はいない。まるで、この全員を自分で産んでおきながら、何の愛情も持っていないような感じがする。事実、そのとおりなのだ。彼女は写真屋の注文など相手にもせず、自分ひとりの運命を凝視してでもいるように、微笑みのかけらさえない虚ろな目

であらぬ方をみつめている。時を超越している彼女の表情とくらべると、その娘たちの訴えるような微笑みには、すでに彼女たちの将来がうかがえる。そして、あきらかに母の愛情を一身にうけているしあわせな息子たち、彼らにも不幸をまねくものが見てとれる。白いタイに燕尾服姿で、オーケストラの指揮者のように堂々としているハンサムなフレデリック。彼にはどこかおとなしくて、何でも言いなりの弱々しいところがありはしまいか。母との愛情の戯れにいくたびも加担しながら、結局は屈辱と失望におわってしまうといった？　ソフカには、もうそれがわかっているのだろうか？　そして、姉妹らしい女の子たち――やがてその一人と恋におちることになる子たちにはさまれて、あぐらをかいている幼いアルフレッド。お行儀をよくしなければと緊張しているその暗く真面目な目は、命令にしたがい、孜孜として働き、傷ついた母の信用をささえる者として、慰めとして、その傷を癒す塗り薬として、その孤独の伴侶として送ることになる生涯を、すでに予感させないだろうか？　ソフカの夫、この子供たちの父親は、やや面目を失うかたちでとうに死んでいて、ここにはいない。賭博が原因だったというが。いずれにしても彼は年寄りで、幼い子供たちにはとうていなじむことはできず、手のとどかない存在だった。彼は年若い妻に興じはしたが、屈することを知らない彼女の威厳にすぐ閉口してしまったのだった。

あらためて見れば、これはあきらかに結婚式の写真だ。新郎新婦はちゃんと中央に立っているではないか。そろって顔立ちのいい新郎新婦だ。だが、いかにも平凡で生気がない。ソフカは何

かに乗っているのだろう、新郎の肩の上になるところから一族の将来を担っている目で前をにらんでいる。彼女にかなう者は誰もいない。やがて証明されたとおり。

写真撮影がすんでしまえばあとはみんなばらばらになって、例のお祭りさわぎになったことだろう。アスピックとか、綿菓子がのっているバスケットなど――たくさんのご馳走をたいらげていると音楽の演奏がはじまって、新郎新婦は客のことなど忘れて踊りだし、年寄りたちはかたまって金ピカの椅子にこしかけ、子供たちはお菓子の山とピカピカの寄せ木の床に興奮して、乳母や祖母たちに止められるまではしゃぎまわったにきまっている。夜がふけるにつれ、葉巻の薫りとともに吐き出される思い出話にみんながしきりにうなずき、味気ない日常の交際の中では忘れられているなつかしい気持ちをとりもどして、みんなが微笑する。名前もわからないこの陽気な男たち（むろん、夫たちだ）も、かつて結婚したときのはかない希望をやっと思いだし、明るい笑顔、おとなしく慎ましい態度をとりもどして、美しいロメオとジュリエットを眺めているが、満足そうに口をつぐんだと思うと、その顔にはとつぜん現実的な表情がうかぶ。そして彼らがわずかに顔を上げてかすかに青い煙をふっと吐き出すのを見た妻たち――彼らよりも要求水準が高いだけに口うるさい女たちは、この男たちと結婚した理由を思い出したのだ。ソフカはこのグループの中心に、いやどんなグループでも中心にいた。ハンサムなフレデリックは誰か女の子をさらうようにして踊りながら、相手の子がとても本気にはできないようなことを言っていただろう。

いや、母に監視されていたのでは、彼自身でも本気にはできなかったようなことを。もっとあとで、とでも女の子たちは思ったかもしれない。幼いアルフレッドの方は勇ましく従妹を床にころがしながら、どうだとばかり母の方を見て、母に叱られ、自分でも情けない思いをしたにちがいない。女の子たち――ミレイユとバベット（ミミとベティだ）――は母親のそばにいて、踊ってもいいと言われるのを待っている。けれども、男たちはその許可を得る手続きの面倒くささを思って粘る気にもなれないので、彼女たちはあまり踊れなかっただろう。この娘たちは体が弱いと、ソフカは断言していたのだ。そして、事実彼女たちはそういう風に見えた。

ソフカが息子たちには英雄や帝王の名を、娘たちにはまるでミュージカル・コメディの人物のような名をつけたのはいかにも彼女にふさわしく、彼女らしい。それで、子供たちの役割は決まってしまったのだ。息子たちは征服者に、娘たちは男と戯れる女になるということに。この命名の仕方に、何にでも貪欲だが頑固な印象をあたえる粗雑なところが感じられるとしたら、それも彼女らしい。ソフカは、子供たちの未来はその名に含まれていると思って、名のつけかたをさんざん考えたのだ。それどころか、彼女は果たしてそれ以外のことを考えているかどうかさえ疑わしい。息子たちはハンサムだと言っても、それは若死にする者のはかない伝説的な美しさにすぎないのだが、父親の破滅的な生涯をものともせず大成するはずだった。兄弟二人で世界を二分し、力をあわせて征服するはずだったのである。フレデリックはヴァイオリンがうまく、アルフレッ

ドは読書が好きでも、こういうことは応接間や書斎の中だけのもので世間とは関係がない。いずれはヴァイオリンも本も捨てて、胸をはり、（ソフカと姉妹たちにたいする）責任をひきうけて、あまりにも長いあいだ眠っている会社を再興しなければならないのだ。二人は知らないまに、かつての父のように産業界の大物なり王者なりになる運命なのである。彼らの父の――自分でも認めていた――ひよわさは遺伝的なものではないかという見方など、ソフカは一笑に付した。そんなことは考える気にもなれない。とにかく、息子たちは父親とはほとんど無関係で、ぜったい彼女だけのものなのだ。女手ひとつで育てあげたではないか？　彼らこそ母親としての献身的な愛情の証ではないか？　フレデリックは彼女を嘆かせるような真似をするかもしれない。そういうことをする許可をもとめるかもしれない。だが、世評のわるい男くらい、行いすましたソフカが賛嘆するものはないのだ。アルフレッドもいさんで兄に追随するだろう。その性格は生まれつきほんとうに真面目すぎるのだ。幼い従妹の細い腰をしっかり抱えて、ほほえんでもらおうと母をふりかえっている彼の顔を見てみるがいい。幼い従妹は彼がそっぽを向いているのに、すでに怒った顔をしている。アルフレッドは彼自身だけでなく、彼らすべてが傷つかないように肩をすくめてやりすごしてしまう方がいいのだが。ところが、大人になれば、彼は兄以上にハンサムになる。彼は豊かな魂にめぐまれた詩人の顔を持ち、老成した神童の目をしている。アルフレッドこそソフカの希望であり、資本なのだ。彼女は彼に賭けている。フレデリックの方は多くの心を傷

つけるのに追われて事業をおろそかにしても――つまり遊び暮らして会社へはろくに出てこなくても、陰気な下の息子のアルフレッドの方は、彼女自身と同じように真剣で目的に邁進することがソフカにもわかっていて、兄も分担していいはずの重荷をかならず一身にになってくれるはずなのだ。アルフレッドの力を借りてこそ自分がふたたび王国を支配できることを、ソフカは知っている。

息子たちは結婚するだろうか？　もちろん、するだろう。誰だって結婚する以上。しかし、それは果てしなく先のことになりかねない。ソフカは、早婚には反対なのである。若いときの喜びには、すこしも心を動かされないのだ。彼女自身は、陶酔する年齢などとうに過ぎてから資産家に嫁いだ。（すくなくとも、彼女はそう信じていた。）彼女は自分が威厳を大事にしたので、誰もがそれに倣うべきだと思っている。息子たちはいずれ結婚するだろうが、その嫁は慎重に選ばなければならない。一族がたどる運命にふさわしい夫婦でなければならないのだ。そのころには一族はふたたび金持ちに、大金持ちになっているはずだから。したがって、快楽ばかりもとめたがる女は問題外である。頭のいい女で、一人か多くても二人は子供が産める程度に若くなければ困るけれども、その他の点では充分に成熟していてくれなければならず、かならずしもそれほど美人である必要はない。見てくれはそれほど問題ではない、と自分が美人のソフカは息子たちに言う。嫁たちはソフカ自身と同じような家の出で、何よりも性格が同じでなければいけない。そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com